

「共存」から「共生」へ —外国人住民を交えた地域づくり

芝園団地自治会事務局長 岡崎 広樹

本日は「「共存」から「共生」へ—外国人住民を交えた地域づくり」と題して、外国人集住団地である埼玉県川口市の芝園団地の実態をご紹介しますと思います。

私は2014年にこの団地に住み始めてから8年が経ちましたが、実は、日本人住民と外国人住民の共存や共生はそう簡単ではありません。なぜ難しいのか、その難しさを踏まえて何をしてきたのが外部になかなか伝わりにくいので、本日はそこを重点的にご説明したいと思います。

外国人住民が日本一多い 川口市の芝園団地

まず、本日のテーマの概念を2つに分けて定義したいと思います。隣近所で日本人の方と外国人の方が生活トラブルなく、「お互いに静かに暮らせる関係」を「共存」、そしてその両者が「お互いに協力する関係」を「共生」とし、この共存と共生という2つの言葉から、団地の実態をご紹介しますと思います。

国内の外国人数の現状について2021年1月1日現在の総務省統計「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数」で見ると、私の住む川口市は、日本で外国人の方が一番多い自治体です。芝園団地はそのなかでもかなり多い方です。

芝園団地のような外国人集住地域の話が身近だという人ばかりではないと思います。ですが、全国的に外国人の方は増えていますし、外国に由来する人口は、今後さらに増える推計が出ています。私の話は全国各地の近未来に起きることとしてご

理解いただければと思います。

芝園団地を簡単にご紹介します。1978年に入居を開始し、総戸数2,454戸、最大で6,000人程度が住んでいました。敷地は約10万 km^2 で東京ドーム2個分以上の広さがある大規模団地です。

芝園団地のある川口市芝園町の人口の推移をみると、1997年に約200人だった外国人は2022年に約2,600人になっています。日本人は1997年に約5,300人でしたが、2022年で2,100人を切りました。2015年11月に日本人と外国人の人口が逆転し、芝園町は国際化の一途をたどっているわけです。現在、芝園町は約60%が外国の方になっている状態です。

住民の年代ですが、30代以下、若者、子育て世代は主に外国の方で、そのうち大半が中国の方です。1978年に30代で入居した日本人が70代になっていますから、お年を召されてきています。つまり、芝園団地は、日本人住民の高齢化と地域の国際化が進んだ、将来の日本の縮図のような団地だと思います。

外国人住民の増加で起きた 生活トラブル

では、外国の方が増える過程で、生活トラブルはどう起きたのでしょうか。

ごみ捨ての問題は、外国人住民が多いところでよく聞く話です。私が芝園団地に住み始めた2014年頃は、ごみ捨て場でごみが散乱する、分別ができないといった問題がありました。2010年頃には、ベランダから階下にごみを投げ捨てる人がいたと聞いています。

岡崎 広樹 (おかざき ひろき)

略歴

1981年生まれ。早稲田大学商学部を卒業後、三井物産株式会社へ入社し、欧州研修員（欧州三井物産、ノルウェー三井物産など）を経験。公益財団法人松下幸之助記念財団松下政経塾第33期生。2015年オランダに滞在し、欧州評議会インターカール・シティ・プログラム加盟都市の取り組みを調査。

2014年に、当時は入居者の半数程度が外国人住民である埼玉県川口市「芝園団地」に移り住み、外国人住民を交えた地域づくりに取り組む。芝園団地自治会防災・防犯・環境部長などを務めるとともに、2015年学生ボランティア団体「芝園かけはしプロジェクト」の発足に関わり、2017年から現職。

芝園団地自治会は、2017年度国際交流基金「地球市民賞」を受賞。

主な著書

- ・外国人集住団地—日本人高齢者と外国人の若者の“ゆるやかな共生”（扶桑社新書 2022年）
- ・論稿「隣近所の多文化共生」の課題—芝園団地の実態と実践から—（PHP 総研 2021年）
- ・雑誌掲載 ルポ「住民の半分以上が外国人！芝園団地「共生」への挑戦」（中央公論 2019年6月号）



また、お子さんの飛び跳ね騒音の話もありました。2010年頃には、階段の踊り場で用が足されていた時期もあったと聞いています。

一方で、差別用語を使って外国人住民に対する嫌悪感を露骨に示す貼り紙がありました。団地の公共スペースにあった机とベンチにも誹謗・中傷の落書きがありました。2010年前後に、外国人が増えたことで問題山積の団地だと報道されることが増えました。すると外国人を快く思わない外部の人々が「視察」と称して訪れはじめました。そういう人の出入りが激しくなった時期と落書きの時期がある程度一致しているので、問題は外部から持ち込まれたのではないかと思います。

今度は外国人側からこの状況を見てみます。皆さん、仮に自分が来日したばかりの外国人だとします。まず入管、税関を通りますが、そこではごみの分別の話は説明されません。次に市区町村の転入手続きです。川口市では中国語に翻訳した「生活ガイドブック」を配っていて、ごみの分別も2ページで説明していました。ところが外国人からすると、実際に母国語で読んだとしても、自分の知らない習慣ですから、すぐに理解できるとは限りません。

来日してから地域に住み始めるまでに、外国の方は日本のごみの分別一つ取っても、しっかりと説明を受けていないため、できないのです。

結局、外国人が集住したことで、日本人側は生活トラブルが改善せず不満や怒りを抱き、外国人側には生活上の不安が募っていきました。

「互いの文化的違いを認め合えるか」

自分と違うと感じる人に関わったとき、その人に嫌な気持ちを抱くことはあると思います。当然、日本人と外国人との間に違いはあるでしょう。しかし、実は私たち日本人同士であっても、母国を同じとする外国人同士でも、いろいろな違いがあると思います。そして違いがあると、関係が難しくなることがあると思います。

総務省の「多文化共生の推進に関する研究会報告書」（2006年）では「地域における多文化共生」を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義しています。

ここで考えたいのが、「互いの文化的違いを認め合い」という部分です。例えば、ベトナムではアオザイが国の民族衣装だと知っていれば違いを認め合えるはずですが、しかし、煙草の煙は受け入れがたい人もいます。つまり、頭で理解すれば許容可能な違いもあれば、心や体が受け付けられない違いもあると分かります。

隣近所に住み始めれば、生活習慣の違いが表面化することは避けられません。では、芝園団地ではどんな対策をしてきたのかという話です。

3つ事例を挙げます。まず、夜の騒音問題です。外国の方のなかには、国や地域によっては夕食後の夕涼みを習慣にする人々がいます。夏の暑い日、夜の10時ごろに窓を開けて涼みながらテレビを見

ていると、外から子どもたちの歓声や笛を鳴らす大きな音が聞こえてきたりします。「ちょっとうるさいんですけど」と言ったら、母国では普通だよと言って帰っていきました。彼らも悪いとは全く思っていないわけです。それでも日本人側からすると、これはちょっと、と思うところがあります。

次にごみの分別は、日本では1980年代に広がったとされていますが、慣れているはずの日本人でも市区町村をまたいで移動すると、分別の仕方が違うので苦労したという話があります。日本人でも難しいなら、分別をしてない国の方は対応できないはずですね。

そして、料理のにおいです。調理に油やニンニクなど結構強い香りのものを使う国の方たちもいますので、たまにほかの住居にもにおいが漂ってしまいます。もちろん彼らに悪気はありません。ですが、このにおいが苦手な方にとっては嫌なわけです。

日本とは母国を異にする方と日本人との生活習慣の違いから、元から住んでいる日本人側が違うと思うものを持ち込まれることで、生活トラブルと感じやすいといえます。要因は日本と彼らの母国の違いであり、構造的な問題なので、対処していかざるを得ません。

ごみの問題は、URの敷地だからできるのだと思いますが、ごみステーションが建っているのに散乱しないようになっています。分別のための掲示も、日・中・英の3か国語にするほか、できる限りイラストを多めにして、初めての方でも捨てやすくしました。

「郷に入れば郷に従え」は正しいか

よく、外国の方の問題の話になると、「郷に入れば郷に従え」という話が出てきます。本日は、私がこの団地に住み始めたときに中国の方に言われて、衝撃を受けた話を紹介します。

ある日、私は中国の方から「日本人は郷に入れば郷に従って言うよね」と言われました。そこで、「いつもそれを言われて大変でしょう」と返したら、その方は「いや、郷に従いたくないわけではないのです」と言いました。「でも、日本の人は、その郷とはどんなものかを説明してくれています

か。私にとっては初めてだから、言われなければ分からないでしょう」と続けられ、私は「確かに」と思いました。そこで、URの管理事務所に行ったところ、入居時に配っていたのは、A4判1枚の中国語で注意事項が箇条書きされた紙でした。私は中国語を全く読めないで内容は分かりませんが、要は「こうしてくれ」「こうしないでくれ」と書いてあるらしいのです。

仮に「郷に入れば郷に従え」が正しいとします。ただ、相手が「郷とはなにか」を知らなければ従えないのは当然であって、この紙1枚を渡されただけで自分の知らないことをできるのかということなのです。

そこで自治会では、「外国人住民向け自治会冊子」を作ってみました。ポイントは2つです。1つは、母国語で書かれてあっても文字だけだった紙の説明書を改善し、イメージしやすくしたことです。例えば、初めて行く場所の道案内には写真や地図があると分かりやすい。そこで、多言語の文字情報だけでなくイラストを配することで、注意事項をイメージしやすくしました。もう1つが、「中国ではこうかもしれませんが、日本ではこうですよ」と説明したこと。なぜそうしてほしいのか、理由を書けるところは書きました。

ポイントは「伝える」から「伝わる」にしたことです。往々にしてこうした話では「多言語のガイドブックを配っているでしょ」と言いたくなります。しかし、一方的に伝えても、相手に伝わったことにはなりません。やはり伝わって、理解して、記憶に定着して、初めて人の行動は変わるはずですから、伝わるように伝えることが大事だと思います。

こうして芝園団地では、少しずつ外国の方に団地の生活習慣が伝わるようになり、昔から住んでいる日本人が、「だいぶ住環境が良くなったね」とおっしゃるまでになりました。やっと共存ぐらいまできたかなというのが、芝園団地の実態だと思います。

共存から共生への移行は可能か

2016年に、神戸新聞の読者投稿欄に掲載された

投稿があります。

「住んでいるマンションの管理組合理事をやっていますが、先日の住民総会で小学生の親御さんから提案がありました。知らない人に挨拶されたら逃げるように教えているので、マンション内では挨拶をしないように決めてください。子供には、どの人がマンションの人かどうかは判断できない。教育上困りますと。すると、年配の方から、挨拶をしても挨拶が返ってこないのが気分が悪かった。お互いにやめましょうと意見が一致してしまいました。その告知を出すのですが、世の中変わったなと理解に苦しんでいます」。

この意見に賛否はあると思います。ただ、同じマンションに住んでいる方が、全員顔見知りではないのは、皆さんもお分かりになると思いますし、一方で、親御さんがお子さんに、知らない人に挨拶されたら逃げなさいと言うことが、無理もない時代になってきているのも、ある程度仕方ないと感じていると思います。

ここで千葉市の自治会加入率を紹介すると、2015年の約70%が2021年には約63%に減少しています。ご存知と思いますが、全国的に自治会、町内会の加入率は下がっていて、役員の高齢化、担い手の減少が起きています。

そう考えると、そもそも日本人同士は共生していましたかという話になります。とすれば、日本人同士が共生していない時代に、「なぜ外国人が住み始めると多文化共生が可能になるのですか」という問いが生じます。この問いは、今後、しっかりと向き合う必要がある重要な問いではないでしょうか。では、芝園団地に戻って、コミュニティ形成はどう難しいかの背景をご紹介します。

第三者の力を借りた関係づくり

先ほどお話ししたとおり、いろいろな取組みをして、芝園団地は共存関係にはだいぶ近づきました。しかし、日本人と外国人が日常的に出会うきっかけもなければ世代も違う、生活時間帯も違いますから、放っておいたら人間関係はできません。そこで芝園団地では、日本人と外国人の間をつなぐ、第三者の力を借りながら両者の関係づく

りを進めていきました。

そもそも私はこの団地に住み始めたときに、3つの「ない」があることに気づきました。1つ目が「住民の共通項が少ない」ことです。生活習慣が違くとトラブルは起きやすい。文化、言葉が違くとコミュニケーションがとりにくい。高齢の日本人と若者の外国人ですから、世代差まであるわけです。

2つ目は「マンパワーもアイデアもない」ことです。マンパワーでいえば、私の所属する自治会は、最大32名の役員がいたと聞いています。2014年度は7名で、年代は80代が2名、70代が1名、60代が2名、50代1名、30代の私でした。当然、担い手が減少し、新しいことを始めるにも腰は重い。既存の活動で手一杯でした。アイデアもないというのは、外国の方は増えましたが、団地に住んでいる日本人が外国人との関係を築くことに慣れていないわけではなかったため「外国人が増えたけど、何をしたいかよく分からなかった」のが実態だったということです。3つ目として、外国人とつながる可能性のある「若者の日本人が地域にいない」。この3つの「ない」のために、両者の関係づくりは難しいと思ったのが現実でした。

どこから手をつけるのか。隣近所に住んでいるぐらいでは共通点が少ないので、見知らぬ隣人にしかすぎません。意識的な橋渡しをしていくしかありません。

そこで日本人と外国人の接点となりそうな場所を挙げてみました。ただ、対象が高齢の日本人と若者の外国人ですから、小学校、中学校、幼稚園、保育園、スポーツ少年団、子育ては共通点になりません。さらに、地域の小さな店舗、公民館のサークル、自治会、地域の日本語教室を検討しましたが、出会いの役割はあってもその機能は極めて限定的です。結局、隣近所に住んでいても、なかなか出会わないのが実態だと分かりました。

「開かれた自治会構想」を活動方針に

このようにコミュニティ形成に難しい背景があるなかで、芝園団地ではどんなことをしてきたのでしょうか。当時、私は3つの「ない」の解決策

を考え、共通項が少ないところは、外国の方が役員になれば、翻訳・通訳もお願いできるし、分からないことも聞けるから、補えるようになると考えました。マンパワーもアイデアもないなら、いろんな人に協力を求めようとしたのです。団地に日本人の若者がいないなら、地域の外から連れてくる以外に方法はないと、この3つの解決策をまとめて、「開かれた自治会構想」という活動方針をつくりました。

これは難しい話ではなく、「地元の組織と協力しよう」、「地元外部の組織と協力しよう」、「地元外部の学生と協働しながら、日本人と外国人の関係づくりを進めていこう」、というアイデアです。これが第三者の力を借りた両者の関係づくりです。

その後、紆余曲折を経て、2015年2月に「芝園かけはしプロジェクト」という、学生ボランティア団体が立ち上がりました。始めたのは「多文化交流クラブ」という取組みです。そこでは、日本人と外国人が1つの場に集まって、地域のイベントを企画段階から一緒に考え、作業しながら、顔見知りになる場をつくりました。みんなで話し合い、持ち寄りのランチ会をやるうとか、中国の方が先生になって中国語教室をやってみようとか。いろんな話のなかから関係づくりをしてきました。

顔見知りになると「この前はありがとうございます」となり、敷地のなかで立ち話をして、「今度こういうのがあるから手伝ってよ」となり、だんだん人間関係が深まって「来年度役員をやりませんか」と言えるようになるわけです。若者が来る前はそういう場さえなく、日本人と外国人の間に接点をつくる場ができたなら、そうした人間関係が発展していく機会が生まれたということです。

2014年度の自治会役員で外国出身者はゼロでしたが、2021年度の役員9名のうち外国出身者は4名でした。中国、バングラデシュ、ガーナの方です。要は出会わなければ人間関係は深まらないという、当たり前のことが起きていたわけです。つまり、共生を「お互いに協力する関係」と定義した場合、共生するためには、日本人と外国人の共通点が少ない場合には、意図して人間関係をつくるきっかけが必要ですし、橋渡しをする第三者も必要ではないかということが分かってきたのです。

さて、いろいろと芝園団地の実態をご紹介してきましたが、ここからは隣近所の住民がそもそもつながる必要はあるのかについて考えたいと思います。

芝園団地の敬老会の打ち上げにガーナ出身の役員が参加していました。以前、私は高齢の日本人の方に彼と話してみたらどうですかと勧めたことがあります。日本に30年以上住み、日本国籍も取得し、日本語もすごく丁寧です。しかし、どんなに日本語がしゃべれるからと言っても、高齢の日本人の方には違和感があり、話しかけずにいました。

ところが、このイベントに彼が来て日本語で普通に話すと、「本当だった、私たちと変らない」と分かったわけです。人間は体験した瞬間に、今まで自分が持っていた考えや思い込みがアップデートされます。どんなに人に説明されても納得しなかったことが、出会いによって得心するわけです。すると、次は全然違う展開が生まれます。

でも、これは出会いがなければできません。外国の方が自治会に入ってくれてよかったと思うのは、目の前の現実に合わせて考えがしっかりと変わっていく機会ができたということです。これは、外国人から見た日本人も、日本人から見た外国人もそうです。やはり人と人がつながっていき、私たちの考えが現実に合わせてアップデートされていくことに、意味があったのだと思います。

自治会の役割とはなにか

せっかくの機会ですので、自治会の役割についても私の考えをご紹介します。

新しく引っ越してきた人と地域の関係をつなげるのは誰かといえば、私はいかねてより自治会しかないのではないかと考えていました。全く自治会に関係のない個人として、突然、見知らぬ人の家に行き「こんにちは」とは絶対に言えません。だからこそ、外国人であっても、日本人であっても、新しく引っ越してきた人と地域をつなぐ役割を積極的に果たしていけるのは、自治会ぐらいしかありません。これが1つ目の役割です。

2つ目ですが、私は、自治会は白い皿のような

ものだと思っています。例えばその上にフルーツをのせてもいいし、前菜をのせてもいい。自治会はただの皿であり、箱です。何をしてもいいはずなのに、歴史があり既存の活動がまずあって、新しいことを始めるのはなかなか難しい。

しかし、開かれた自治会構想のように、自治会が外部の人と協力してもいいはずで、住民自治を原則としつつ、外部の人たちと協力することで新しいものを入れる箱になる役割もあるのではないのでしょうか。芝園団地は歴史わずか40年ですが、地域で活動してきた実績があるので、古参の住民たちの自治会に対する信頼は非常に厚いものがあります。

実際に自治会が外部と協力しますというスタンスをとれば、地域の人には納得しなくても、見守ってはくれるというのが私の感覚です。私自身も、たまたま住み始め、自治会役員をやったことがよかったです。

いろいろなことを始めるにあたって、箱である自治会をどう使うか。そのために、培ってきた信用をどう生かすかを考えないと、宝の持ち腐れです。いろいろな使い方ができる箱がまだ地域にあることを、もう一度考え直す必要があると思っています。

共存から「ゆるやかな共生」へ さらに多文化共生へ

共存に至って初めて共生に進めます。まずは、騒音を出さないなど、地域社会の土台としてお互いが静かに暮らせる最低限の関係をつくるべきではないのでしょうか。外国人であれ、日本人であれ、まずは最低限の共存のラインを築きましょうということです。

共存できたとしても、両者の間にはさまざまな違いから共通点が少なく、人間関係を築きにくいことがあります。そうした場合は、第三者の力を借りながら、関係づくりを少しずつ進めることがいいのではないかと思います。

外国人が居住する全国の10団地を比較した2010年の論文があります。これには、生活トラブルなどの問題が表面化する時期の目安が記載されていて、小規模な団地の場合は外国人住民の人口割合

が10%程度になるとトラブルが表面化するとしています。大規模な団地の場合は、3%~5%です。対応の取組み開始時期も、外国人の同居率10%未満の段階から、外部支援も含めて具体的な取組みに着手することが望ましいとしています。

つまり、ある一定数を超えると、違いが見えやすくなるのだと思います。トラブルを経験する人も増えるので、地域のなかでより見えやすくなっていく。さらに、取組みの開始時期は外国の方が少ない段階から望ましく、自分たちだけで取り組むことには限界があるので、外部の支援を上手に活用することが必要なのです。

母国との違いというもの、これは芝園団地で起きていることの氷山の一角でしかないと思います。特殊に見られがちな外国人集住地域ですが、隣近所の人がつながっていないのは日本社会の現状であり、日本社会そのものが共存も共生もしにくくなっていませんかと言いたいわけです。なぜそうなるのかを考えると、人々の移動が激しくなって見知らぬ隣人が増える社会になっているからです。

昔は、地方から都会に、現在は海外から日本に人が移動してきます。労働力が足りないと人は移動します。人が移動すれば見知らぬ隣人は増えやすくなります。すると、隣に気もつかなくなり、トラブルが増えるのだと思います。とくに外国の方が来られると、日本各地の隣近所で起きている共存、共生しにくい現実がより色濃く、見えやすく、分かりやすく起きるだけではないのかと思うわけです。

そもそも隣近所の人とつながりたいですかという問題意識がまず初めにあります。今、地域社会で何が起き始めているのか。共通点が少ない多様な人々が集う場所がありません。ですから、まずは隣近所に共生したい人々が出会える場づくりが大事だと考えるわけです。共存だけしたい人や共生したい人がいてもいい。お互いに住みやすい、ゆるやかな共生をまず築くことが大事ではないでしょうか。プロセスとしてはまず共存が必要で、ゆるやかな共生をしていきたいと思います。そして可能なら、総務省が言う、理想としての地域における多文化共生を目指す取組みを、不断に続けることが大事ではないかと思います。